

保育者養成課程に在籍する大学生の心理的特徴

A Psychological Feature of the University Students in the Childhood Care and Education Course

次世代教育学部こども発達学科

小島 啓子

KOBATAKE, Keiko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

要旨：幼児教育・保育の無償化や両親共稼ぎの増加による育児の外部化，少子化，育児不安を持つ親の増加といった近年の社会情勢の変化に加えて，療育機関の増加等により保育者を取り巻く環境も変わり，保育者の役割は多様化し高い専門性が求められるようになってきている。しかし，実際には保育者の離職率は高く，それがキャリアアップを拒む要因ともなっている。本研究は，本学科に在籍する学生の心理的特徴を調査分析し，保育職として就職し意欲を持ち続ける学生を養成するための学生への関わりや教育内容を考察するものである。保育者効力感やバウムテストの結果から，本学科の学生のいくつかの心理学的特徴が明らかになり，それに基づいた教育内容の示唆が得られた。

キーワード：保育者養成，保育者効力感，バウムテスト，心理的特徴

I. 問題と目的

2019年の幼児教育・保育の無償化の実施や待機児問題への対応，社会情勢の変化等，近年は保育者の必要性が質量ともに高まっている。2006年に創設された認定こども園を含めた保育所等は，2020年には37652園，利用児童数も2737359人と年々増加し，さらに3歳未満児の保育所等の利用率も39.7%であり，これも年々増加している。さらに，児童発達支援事業所や放課後等デイサービス，児童養護施設等，保育所以外の福祉や療育機関での保育職採用も増えている。また保育所保育指針の改定により，保育士には従来の保育に加えて保護者支援や地域の子育て家庭への支援，養護と一体になった教育を求められ，幅広く高度な専門性が必要とされているのである。

しかし，保育士の離職率は高く，私営保育所では12.0%，公立でも10.3%，保育士の約半数が経験年数7年以下である。（平成29年社会福祉施設等調査の概況 厚労省）また，全国保育士協議会（平成21年）は，新卒保育士では卒業後に勤務した施設を1年未満で離職する割合が4人に1人と高く，さらに3年後には約半数が離職してしまう，といったデータを発表している。家庭の養育能力の低下などにより保育士の役割が増え，専門性の向上や保育士を継続することによ

るキャリア形成が求められている（保育所保育指針）保育者養成に関わる教育機関，特に本学等の4年生大学はより専門性の高い保育者の養成を目指しており，進路変更や早期の離職に対する対応策が必要であると思われる。

本学こども発達学科の特徴として前年度の調査（小島2020）により，保育者を目指して入学してきても，大学4年間で保育者を断念する学生が多いといえることが示された。

本研究では，本学の保育者養成課程に在学する学生の心理的特徴をバウムテスト等の心理検査と保育者効力感等の観点から分析するものである。

それにより，本学の保育者養成課程に在籍する学生が入学時の意欲を持続させ，社会に求められる保育者を養成するために必要な関わりや教育内容について明らかにすることが最終的な目標である。そのために，段階的に研究を進めていくことを考えている。「前回の保育者養成課程に在籍している大学生の意識調査」において，大学生各自の個人的体験と進路変更についての関連性が示された。

本稿では心理的特徴に着目し以下の項目について調査し結果を分析して報告するものである。

- ① 本学の保育者養成課程に在籍する大学生の保育者効力感に関する調査

保育者効力感尺度（保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念）を実施する。

② 本学の保育者養成課程に在籍する大学生のバウムテストの分析

バウムテストは実施が簡便な投影法であり、精神的・情緒的発達や性格などの心理的な側面を観ることができる検査である。臨床場面では個別検査を行うが、研究指標の変数として実施する場合は集団実施が多く、本研究でも集団で実施し分析する。

③ 保育者として必要な資質についてのアンケート結果の分析

④ ①②③の結果から学生の心理的特徴を考察する。

II. 方法

調査対象：こども発達学科在学生 100名（1年生46名、2年生54名 データ無記入項目ありを除く）

表1 調査対象 内訳

	全体	1年	2年
総数	100	46	54
女子	80	39	41
男子	20	7	13

調査時期：2018年10月上旬

手続き：大学の講義時間内に質問紙の記入とバウムテストを実施し、ただちに回収した。所要時間は20分程度であった。

倫理的配慮：質問紙、バウムテストともに無記名であり、個人が特定されないことや研究目的以外には使用しないこと、回答の自由等の倫理的配慮について説明し、了解した学生だけが提出することとした。

質問紙の構成（調査内容）：①保育士として必要な資質（複数回答可）②子どもが好きな強さ（5件法）③保育士（幼稚園・保育所・施設等の保育職等）希望の強さ（5件法）④保育者効力感尺度（1項目、三木・桜井1998）5件法（表2）の4項目。

表2 保育者効力感尺度の項目

①	私は子どもに分かりやすく指導することができると思う。
②	私は子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う。
③	私は一生懸命努力しても、登園を嫌がる子どもを無くすことはできないと思う。
④	保育プログラムが急に変更された場合でも私はそれに上手く対処できると思う。
⑤	私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う。
⑥	私はクラスの子ども一人一人の性格を理解できると思う。
⑦	私はやる気のない子どもにやる気を起こさせることは難しいと思う。
⑧	私はどの年齢の担任になっても、うまく対処できると思う。
⑨	私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う。
⑩	私は保護者に信頼を得ることができると思う。
⑪	私は子どもが不安定な時にも、適切な対処ができると思う。
⑫	私はクラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う。
⑬	私は一人一人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う。
⑭	私は園で子どもに基本的な生活習慣をつけさせることはなかなか難しいと思う。
⑮	私は子どもの活動を考慮し、適切な保育環境(人的・物的)に整えることに十分努力できると思う。

III. 結果

1年と2年生では、保育関連科目の学習時間や実習体験（2年生は保育所と福祉施設実習を終えているが、1年生は2日間の体験保育だけである）に違いがある。そのため、結果は全体・1年・2年と分けて示し、これを変数として分析した。

1. 「保育者希望」と「子どもが好き」についての1・2年生の比較

前年度の調査（小島2020）により本学科に在学中に保育者を断念する学生が多い傾向が示されたが、本研究の被験者においても1年生と2年生の比較を行った。さらに、前年度の調査で保育者養成課程への進路決定の最大理由（51.7%）であった「子どもが好き」についての1, 2年生の比較を行い、結果を図1に示した。

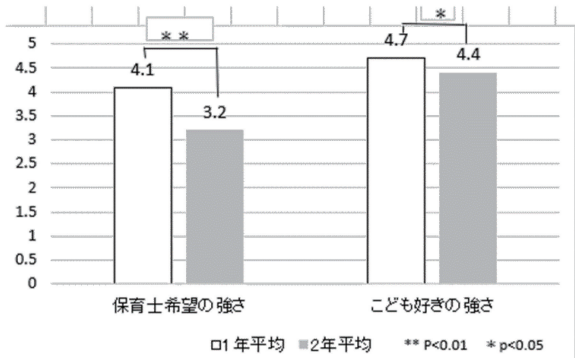


図1 保育士希望と子どもが好きの1, 2年生比較

回答方法は、1ほとんどそうは思わない～5非常にそう思う、の5件法である。数値が高いほどその傾向が強いといえる。

結果は、保育者希望について1年生の平均は4.1、2年生が3.2と下がり (P<0.01)、子ども好きについても1年生は4.7、2年生が4.4 (P<0.05)と両項目とも下がっていた。

2. 保育者効力感について

「保育者効力感」とは、三木・桜井(1998)により「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義された概念であり、Ashton(1985)が発表した「教師効力感」をもとに、保育者、あるいは保育専攻生に適用するために、三木・桜井(1998)によって開発されたものである。このベースはBandura(1977)の自己効力感理論である。

本調査では、表2の15項目を採用したが、分析では三木・桜井(1998)の因子負荷量の分析結果をもとに以下の10項目の結果を用いた。

①私は子どもに分かりやすく指導することができると思う。②私は子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う。③保育プログラムが急に変更された場合でも私はそれに上手く対処できると思う。④私はどの年齢の担任になっても、うまく対処できると思う。⑤私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う。⑥私は保護者に信頼を得ることができると思う。⑦私は子どもが不安定な時にも、適切な対処ができると思う。⑧私はクラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う。⑨私は一人一人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う。⑩私は子どもの活動を考慮し、適切な保育環境(人的・物的)に整えることに十分努力できると思う。

回答は1ほとんどそうは思わない～5非常にそう思

う、の5件法である。数値が高いほどその傾向が強いといえる。結果を図2に示した。

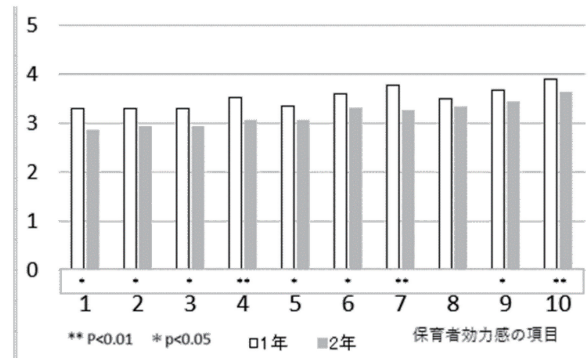


図2 保育者効力感の1, 2年生比較

すべての自己効力感の項目で2年生の方が1年生より低くなっている。平均値で比較すると、1年生が3.51 (SD0.21) 2年生が3.16 (SD0.25)であり、2年生の保育者効力感は1年生に比べて有意に (P<0.01) 低くなっている。

特に⑦私は子どもが不安定な時にも、適切な対処ができると思う。④私はどの年齢の担任になっても、うまく対処できると思う。⑩私は子どもの活動を考慮し適切な保育環境に整えることに十分努力ができると思う。の3項目は2年生との差が大きく (P,0.01)、逆に⑧私はクラス全体に目を集団への配慮も十分できると思う。は、1年と2年の差が唯一なかった。

3. バウムテストについて

バウムテストはKoch,K.(1949)によって体系化された投射描画法である。「実のなる木」を鉛筆で描くという手続きの簡便さや被験者の負担が少ないことから心理テストとして広く使用されている。投映法であるがゆえに分析に関しては主観が入りやすいともいわれているが、現在まで多くの研究結果が集積され、妥当性や信頼性が検証されつつある。

Kochは、バウムテストの解釈として①空間象徴…樹木の紙面上の位置や大きさによる分析。②形態分析…樹木の形を分析する。③動態分析…鉛筆の動きや運筆からの分析。の3つの側面を挙げている。

本研究では①空間象徴について分析を行った。樹木の大きさや描かれた位置によって、その人の生活空間における位置づけや対人関係の推測が可能とされている。

(1) サイズ(大きさ)

高橋ら(1986)の用いた基準により、用紙の3分の1から5分の1を「普通のサイズ」、これ以下を「小

さいサイズ」これ以上を「大きいサイズ」とした。本研究では、樹木の縦サイズは、普通サイズが9.8cm～23.6cm、9.8cm未満が「小さいサイズ」23.6cmより大きいものが「大きいサイズ」となる。結果を図3に示した。

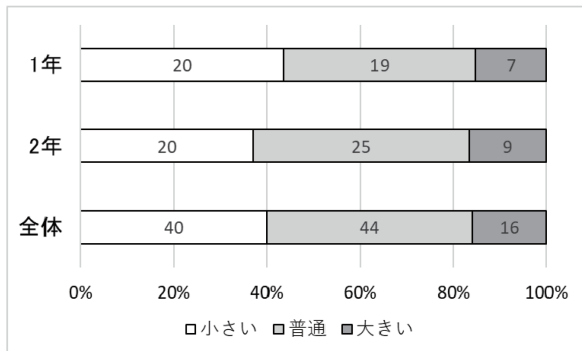


図3 サイズの割合 1, 2年生と全体の比較

全体には、小さいサイズの個数が40、普通のサイズが44とほぼ同じであり、大きいサイズは16と少なくなっている。1年生については、小さいサイズの方が個数では1多くなっているが、2年生では普通サイズの方が5多くなっている。

高橋ら(1986)は、大学生は男女ともに生涯で大きいサイズを描く時期であり、大きいサイズの樹木画は約60%と報告している。

サイズはその「個人の持ち歩いている空間」と考えられており、サイズが大きければ環境の中での自分が関与できる部分が大きいとされる。さらに高橋ら(1986)は、サイズは被験者と環境との関係を示し、①自尊心②自己拡大の欲求③活動性④感情状態を示すとしている。

さらに井村ら(2012)では、例えば大きすぎる木は、自己顕示・自己拡張・過活動・高揚した気分・攻撃性などを示し、一方、小さすぎる木は、不安・(低い自己効力感につながる)低い自尊心・自己抑制・劣等感・抑うつ感・無力感・引きこもりなどを示し、時には抵抗した状態や依存性を示すとされている。

(2) 位置

位置については、一谷ら(1988)による分割法を用いた(図4)。用紙を縦横ともに2等分し図4のように、右上の領域をA、左上の領域をB、左下の領域をC、右下の領域をDとし、さらに中央の領域をOとし、全体を5つの領域に分けた。本調査の場合、木の中央をポイントし、その領域を位置とした。

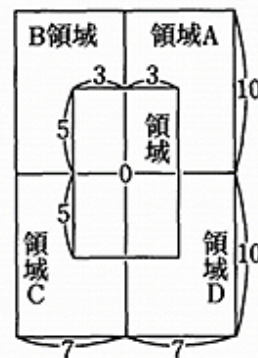


図4 画面の分割 (一谷ら (1988))

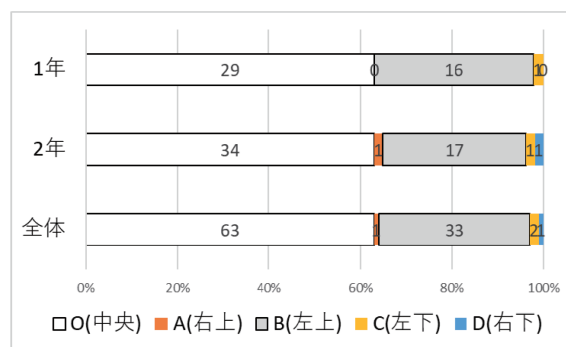


図5 画面5分割結果 1, 2年生と全体

中央の領域の使用が、1, 2年生ともに60%強であり、一番多くなっている。が、次に多いのが左上の領域Bであり、1, 2年生とも約35%である。

バウムテストでは画面の位置の解釈としてグリュンワルドの空間図式(図6)を取り入れている。左下から右上へ向かう対角線上に過去、現在、未来をあらわしている。右上は目的・終末・結果をあらわす能動性の領域で生への対決を示し、左上は回避・受動性の領域で生への傍観を示し、左下は原初・起源の領域で幼児期への退行を示し、右下は拒否・取り消しの領域で敗北感を示す(伊東2006)。

一谷ら(1988)の調査では、領域使用量について

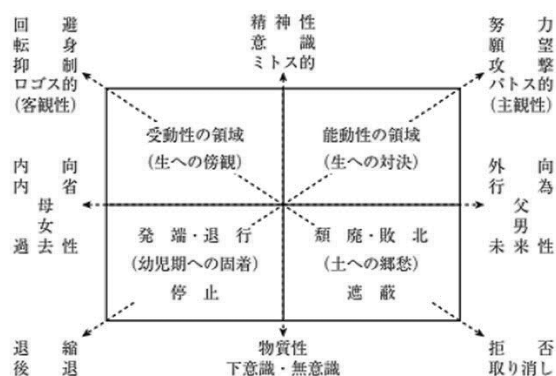


図6 グリュンワルドの空間図式

は、大学生は中央、左上、右上の順に使用量が多くほぼ同じ程度である。左下、右下の領域の使用率は前3領域の半分程度である。この調査では使用量の分析であり、本調査の樹木の中央ポイントとは分析方法は異なるが、全体的な傾向は参考になるものと思われる。

4. 保育士として必要な資質について

「保育者に必要な資質」について、複数回答の自由記述でアンケートを行った。結果を1・2年生別に表3に示した。

表3 保育者に必要な資質（複数回答）

保育士として必要な資質	1年生	2年生	全体
コミュニケーション力	14	15	29
笑顔	22	6	28
子どもの気持ちに理解する・寄り添う・立場になって考える	9	15	24
子どもが好き・愛情がある	9	8	17
専門的知識・技術・ピアノ・造形等	4	11	15
観察力	8	3	11
保護者の気持ちに寄り添う・連携	2	7	9
広い視野・周りをみる力	7	2	9
対応力	4	2	6
細かいことに気づく・気配り・周りの人への配慮	5	1	6
元気・明るさ	1	5	6
忍耐力	4	0	4
健康・体力	3	1	4
やさしさ・おもいやり	0	4	4

表3には、4名以上の記述があった語彙・文を記載した。自由記述であるためある程度の内容が似たものはまとめた。

多いのは「コミュニケーション能力」「笑顔」がそれぞれ29、28であった。コミュニケーション能力は1、2年生に差はみられなかったが、「笑顔」は1年生が22、2年生が6と1年生が非常に多くなっていた。これとは逆に、全体では15であった「専門的知識・技術・ピアノ・造形等」は、2年生が11、1年生が4と差が大きく、2年生が多く記述していた。全体として24の記述があった「子どもの気持ちに理解する・寄

り添う・立場になって考える」も、2年生の記述が多い。

記述数が17の「子どもが好き・愛情がある」は1、2年生でほぼ同じであった。1、2年生で数に差がみられたのは、「観察力」（記述数11）「広い視野・周りをみる力」（記述数9）「対応力」（記述数6）「細かいことに気づく・気配り・周りの人への配慮」（記述数6）「忍耐力」（記述数4）「健康・体力」（記述数4）で1年生が多く、「保護者の気持ちに寄り添う・連携」（記述数9）「元気・明るさ」（記述数6）「やさしさ・おもいやり」（記述数4）で2年生の記述が多かった。

記述されたその他の資質として、3名が子どものことを一番に考える、厳しさ・叱ること・ダメと言える、子どもへの影響力・指導力、一人一人にあった対応を選び、2名が客観的にみる力、教養・基礎学力、諦めない、責任感、積極性、判断力、自分が楽しむことができる、努力しようとする気持ち・やる気を、1名が子どもの最善の利益になるように援助すること、集団を集める力、行動力、理解力、教育力、思考力、発想力、想像力、安全、おもしろさ、自分の感情を重要視しすぎない、情報共有（以上2年生の記述）、子どもの笑顔や楽しいことをする、臨機応変に動く、ボランティア精神、声掛け、複数の事を同時にできること、相手の立場に立って考える、冷静さ、人間性、包容力（以上1年生の記述）を記述した。自由記述で複数回答のため、さまざまな記述があった。

IV. 考察

本調査の調査項目の結果と1、2年生の結果の比較から、本学の学生の特徴として、①保育者希望の強さが学年が進むと少なくなること。これは前調査（小島2020）の結果と同様である。②子どもが好きの強さも減じていた。③保育者効力感についても、実習を経験した2年生の方が低くなっていた。三木ら（1998）や水野（2001）、前田（2018）では実習体験が、保育者効力感を高めるとしているのに対して、石川（2003）は入学後の学生の保育者効力感が徐々に減少していくこと、中村（2006）は実習経験のない1年生の方が実習後の2年生よりも高いことを報告しており、「夢見る保育者効力感」と名付けている。（前田2018）これは、本学の大学生にも当てはまると思われる。④バウムテストでは、大学生の平均（高橋ら1986）に比べて明らかにサイズの小さい学生が多く、印象として小さく左上に中心がある樹木が多く、自信を持った生き生

きした学生像が浮かびにくい。サイズの小ささは、不安、低い自己効力感、劣等感、無力感等を示し、左上の位置は受動性の領域で生への傍観を示すといわれている。⑤必要な資質については、実習を体験した2年生になると、「笑顔」が減り、「専門的知識・技術・ピアノ・造形等」や「子どもの気持ちに理解する・寄り添う・立場になって考える」等、より具体的な現場感覚に近い記述が多くなっている。2年生になると「夢見る」保育者像から現実的な保育者像を持ちつつあるのではないかとと思われる。

これらの結果から、本学の学生は心理的特徴をまとめると、低い自己効力感や無力感、劣等感を持ち、受動的な態度をとるものが比較的多く、実習体験により「夢見る」から「現実」の保育者像や保育現場を知り、保育者効力感や保育者希望が減るのではないかと推測される。

しかし、実習を体験することで、より具体的な保育者として必要な能力に気づく傾向もみられる。水野(2001)が、保育実習は子ども一人ひとりを理解し指導する自信を高めるのに寄与している、としている。言い換えれば、ある程度子ども一人ひとりを理解することの学び、具体的な指導方法の技術を得ることで、実習体験が自信につながるものと推測される。

V. 今後の課題

本稿では本学科の学生の心理的特徴について言及し、いくつかの特徴が明らかになった。しかし、一つの学年を縦断的に追っていくことで、さらに詳細でより有用なデータを収集できると思われる。

本学は体育会系の部活で活動する学生が多いという特徴もある。心理的特徴にはその要因の影響もあると思われるが、今回は未調査である。

最終的な研究目標である入学した学生が保育者になる意欲を継続させ、就職後も働き続ける保育者を養成するために必要なことを、様々なデータから分析して保育者養成に役立たせたいと考えている。

〔文献〕

平成29年社会福祉施設等調査の概況 厚労省
保育士等のキャリアアップ検討特別委員会 報告書
(2017)
一谷 彊 (1997), 「バウムテスト診断的解釈の理論と技法」, 西山学報 (京都西山短期大学), 第45号, pp.1-50

一谷 彊・相田 貞夫・小林 敏子・津田 浩一・山下 真理子・弘田 洋二・林 勝造・国吉 政一 (1988), 「バウムテストによる生涯的発達研究〔III〕: 空間領域の使用量と加齢の関係」, 京都教育大学紀要A, 第72号, pp.1-29
井村 成美・西村 喜文 (2012), 「青年期の自我状態: 自我発達上の危機状態尺度とバウムテストとの関係」, 西九州大学健康福祉学部紀要, 第43号, pp.49-56
石川 隆行 (2003), 「保育者を目指す短大生の保育者効力感について」, 一宮女子短期大学研究報告, 第42号, pp.315-322
伊東 真里 (2006), 「バウムテストの臨床的診断に関する研究」, 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, 第11号, pp.207-216
小島 啓子 (2020), 「保育者養成学科に在籍する大学生の意識調査」, 環太平洋大学研究紀要, 第15号, pp.187-192
前田 有秀 (2017), 「保育専攻生における保育実習経験の効果に関する研究」, 尚綱学院大学紀要, 第73号, pp.42-54
三木 知子・桜井 茂男 (1998), 「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の効果」, 教育心理学研究, 第46号, 203-211
水野 里恵 (2001), 「幼児教育専攻学生の保育効力感—その発達過程と保育実習自己評価との関連—」 愛知江南 短期大学紀要, 第30号, pp.97-110
中村 多見 (2006), 「保育学生の保育観(1)—保育者効力感の発達—」, 高松大学紀要, 第45号, pp.197-206
高橋 雅春・高橋 依子 (1986), 樹木画テスト, 文教書院
全国保育士養成協議会 (2010), 「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅱ—調査結果からの展開—」, 52